

人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ

## 第2部 エチオピアの宗教：絶え間なき再生

記録映画

### 「ヤアへの参詣—参詣の旅人と迎える人々」 を制作して

松波康男

ヤア村(ベニ・シャングル=グムズ州)は、西部ムスリム・オロモにとって最大の聖地となっている。イスラームの祭日には、西オロモを中心としたエチオピア各地から大勢の人々がヤア村へ参詣に訪れる。

村には1953年に亡くなったティジャーニー教団の導師アルファキー・アフマド・ウマル(Ai-Faki Ahmad Umar)の墓廟があり、その周りにはアフマド・ウマルを崇敬する人々が集落を形成し、参詣者を迎え入れる。大多数の参詣者はムスリムであるが、わずかながらキリスト教徒の姿も見られる。病気、貧困、精神的ストレスからの救済を望む者、アフマドへの崇敬の念から参詣に訪れる者など、その動機はまさに十人十色である。

ヤア村への参詣の機会は1年に3度あり、預言者の聖誕祭(マウリド)、昇天祭(ミウラージュ)、犠牲祭(アラファ)に行われる。そのうち、参詣者の数が最も多いのがアラファである。

アフマド・ウマルは、生前、イスラームを教え広めるだけでなく、難病の治療などさまざまな奇蹟を起こして人々を救済したとされ、彼が住居を構えたこの土地には、彼を敬愛し、慕う人々が移り住んだ。

現在のヤア村の住民も、アフマドの傍で暮らすことを決意してヤア村へ移住した人々やその子孫であり、アフマド没後は墓廟の管理と参詣者の世話を村全体で行っている。住民は決して経済的には豊かとはいえない農民がほとんどであるが、生前、アフマドが訪問客に無償で宿と食事を提供したことに倣い、参詣者のために無償で宿と食事を

提供する。この参詣者へのもてなし行為には、住民の共同体意識とアフマドへの崇敬の念が集約されているのである。

この映画で参詣者と彼/彼女らをもてなす住民の交流が主要なテーマとなっているのは、そうした理由による。

近年、参詣者の大半は長距離バスを利用してヤア村を訪れるが、一部の参詣者は、経済的な理由などから、今もなお徒歩でヤア村を訪れる。

2006年1月、私は徒歩による参詣の旅の一部同行させてもらった。そこには90歳の老女や、乳児をおぶった母親も見られた。食材や調理道具を背負い、ムスリムの民家に宿を借りながらヤア村を目指すその旅は容易なものではなかった。参詣者は何度も神に救いを求め、アフマドの名を呼んだ。しかし、一方では、談笑がとめどなく続き、宗教歌を朗唱するなど旅を楽しむ姿も見られた。

私はヤア村の参詣儀礼の映像をもとに民族誌映画を制作した。この映画の主要なテーマは、(1)ヤア村住民の日常的な社会、宗教生活の様子、(2)参詣者の旅の様子、(3)アラファでのヤア村住民と参詣者の交流の様子の3点である。

(まつなみ・やすお/南山大学)